

祈りの力

ジョージ・ミューラー



水曜日のカー

ISBN4-87207-125-5 C0016 P2000E

定価2000円(本体1942円)

東京都立中央図書館



10 163738

祈りの力・

ジョージ・ミューラー

第一部 祈り

第一章 あなたの口を大きく開けよ 9

第二章 祈りに応えられる神 15

第三章 祈り続けよ 49

神がなされた奇跡 59

第二部 クリスマス生活

第一章 新生したばかりのクリスマスへ 65

第二章 喜んで捧げる祝福 93

第三章 パウロの刺 103

第四章 落胆したとき 109

第五章 友なるイエス 117

第六章 御心を確認する方法 123

第三部 講解メッセージ

詩篇三篇 129

解題 161

関係略年譜 169

第一部
祈り

第一章 あなたの口を大きく開けよ

第二章 祈りに応えられる神

第三章 祈り続けよ

神がなされた奇跡

第一章 あなたの口を大きくあけよ

「あなたの口を大きくあけよ、わたしがそれを満たそう。」（詩篇八一・一〇）

私たちは、絶えずこの御言葉に心をとめておかねばなりません。すべての神の子供には、神に話さなければならぬ多くの必要があります。だからこそ、私たちの恵み深い主は、御自分の子供たち一人ひとりにこの御言葉を与えてくださったのです。

神はこう語っておられるかのようにです。

「さあ、多くのものをわたしに求めなさい。わたしに大きなものを期待しなさい。大きな祈りの課題をもって私の前に来るのです。わたしは神であって、人ではありません。あなたに豊かに与えることは、わたしにとって喜びなのです」

私たちが、ある成功している実業家のところへ助けを求めに行ったとしましょう。そのような場合、決して一ペンスであるとか、一〇ペンスといった少額を求めてはいけません。それよりもずっと多額の援助を求めた方がよいと思います。というのも、そんなに少額しか助けを求めないということは、相手に対して失礼になるからです。

まして相手が全知全能の神であるならば、なおさらのことではないでしょうか。その方から自由に求めてよいと許可がおりているのに、小さな問題の解決しか求めないとしたら、主に対してたいへん申し訳ないことです。少なくとも、そう思わなければならないでしょう。

この地上でどんなに好き勝手に権力を振るっている者でも、エホバの神の御前では無に等しい存在です。ですから、神をお喜ばせたいと願うなら、私たちは主に大いなることを求め、主が確かに大いなることをしてくださると期待しなければなりません。このことが「あなたの口を大きく開け」という聖句で比喩的に教えられています。そしてこの御言葉に応答する者への約束は、「わたしがそれを満たそう」というものです。誰であれ、この励ましの言葉に従って行動する者は、神がこの約束を守られるのを見てください。この御言葉の原則に従って行動して、神がこの約束通りに働いてくださらなかったことがただの一度でもあったかどうか、今までの主との歩みを振り返ってみましょう。

しかし、その時に決して忘れてはならないことがあります。祈りの応えが、まだ眼

に見える形で与えられていないとしても、決して失望することはないということです。神は御言葉の約束を決してお破りにならない方ですから、まだその成就が与えられていないということは、主はこれから応えようとしておられるということなのです。ですから皆さん、さらに継続して忍耐強く主を待ち望もうではありませんか。これには神の栄光がかかっているのですから、主イエス・キリストの御名によって、神に希望をおき続けるのです。その時に私たちは、「私がそれを満たそう」という約束の成就を見ることがでしょう。

同じ詩篇に書かれている次の御言葉を黙想する時に、胸が熱くなる思いがします。

『ああ、ただ、わが民が私に聞き従い、イスラエルが私の道を歩いたのだっただけ。わたしはただちに、彼らの敵を征服し、彼らの仇に、私の手を向けたのに。』主を憎む者どもは、主にへつらっているが、彼らの刑罰の時は永遠に続く。しかし主は、最良の小麦をイスラエルに食べさせる。『わたしは岩の上にできる蜜で、あなたを満ち足らせよう。』（詩篇八一・一五―一六）

神にとって、私たちに最善のものを与えることが最高の喜びであるということを中心に刻みましよう。主はこの御言葉を通して、私たちに益となるものならすべてを与えると語っておられるのです。

第二章 祈りに応えられる神

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」(マタイ七・七、八)

私たちの父なる神は、限らない愛をもって、御自分の子供たちすべてを愛しておられます。しかも、一人子イエス・キリストを愛するのと少しも変わらない愛で、最も頼りない、最も弱い神の子供でさえも愛してくださるのです。この限らない愛とは、いったいどのようなものでしょうか。私たちの生涯で許される試練、苦悩、誘惑の数がどれほど多くても、主はその大きさと千差万別の色彩を御存知です。この地上の旅路を続ける私たちを、主は理解してくださるのです。そして、そういった試練を乗り越えるために、主は私たちのために祈りに関するすばらしい約束を備えてくださいました。

ですからキリストチャンである私たちは、どんな試練、困難、苦しみ、誘惑が来ても、何でも天のお父さまの御前にもって行くことができますのです。神に力を求め、助

言と導きを求めましょう。そうして後、主の愛に満ちた次の助言を実行に移すなら、多くのクリスチャンの状態は今までと違ったものとなるでしょう。

「あなたがたの思い煩いをいっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」(第一ペテロ五・七)

そして、私たちの美しい主イエス・キリストも、御自分が御父に愛されているのと同じ愛で、私たちを愛してくださっています。問題は、私たちがこのことを受け取れるかどうかにあります。

最初に、御父が御子イエス・キリストを愛されるのと全く同じ愛で私たちを愛してくださっていると話しました。そして今、主イエス・キリストが、御父に愛されているのと全く同じ愛で私たちを愛してくださっていると話しています。そしてこの神の愛は、最も弱い者に向けられている、とも語らせていただきました。この言葉が最初に響かない人がいるかも知れません。しかし聖書がこう教えているのです。

「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。」(ヨハネの一五・九)

「それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたことを、この世が知るためです。」(ヨハネ一七・二三後半)

私たちをこのようにすばらしい愛で愛しておられる麗しい主イエスには、一つの特徴があります。主はこの地上を歩まれた時、私たちと全く同様に困難、試練、誘惑を通過されました。主イエスは人々に嘲られ、軽蔑されました。この方は紛れもなく、聖なる神の御子でした。それなのに、体を休ませるために枕する場所もなかったのです。罪は犯されませんでした、あらゆる点で誘惑に遭われました。つまり、主は御自分の弟子たちがこの地上でどのような思いをしているのかをよく御存知なのです。ですから一番最初に挙げたように、祈りに関する貴重な約束を与えてくださいまし

た。そして私たちがこの約束を正しく活用すれば、主が実生活の中で、日々重荷を負ってくださる方だと知ることでしょう。この方は、私たちが悲しみに落ち込むとき、弱り果てたとき、苦しみに耐えかねているときに、喜んで助けてくださる方です。私たちがこの地上で生活している間に通過する苦しみの中で、主が触れることのできないものは一つもありません。

祈りに関して約束の言葉を語るのが私たちだったら、どのような言葉を語っていたでしょうか。この約束の言葉を語る役割が私に託されていたら、「求めなさい。そうすれば受けるのです」と語るのが精一杯だと思います。主イエスのような確信はとも抱けないからです。

しかし私たちの眼の前に置かれているのは、非常に深く、広く、すべての面において言葉に言い尽くすことができないほどに麗しいものです。

しかしそれと同時に、主が約束を与えてくださる時に、私たちの方で行わなければならないことがあります。それは、聖書の一つの部分を他の部分と比較するということです。というのは、御言葉の他の箇所、その約束が果たされるための追加記事が

書かれていたり、あるいは条件が書かれていたりするからです。このような条件、追加部分を私たちが忘れてしまうと、祈りを通して本来与えられるはずの恵みを受けにくくなってしまうのです。

御心になう祈り

このように考えるとき、ヨハネの第一の手紙五章二三節から一五節までの御言葉は、特に大切なポイントの箇所であると思います。

「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちをもっていることを、あなたがたによくわからせるためです。何事でも神の御心になう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が

聞いてくださると知れば、神に願ったそのことはすでにかなえられていると知るのです。」

祈りに関してまず第一に注目すべき点がここに述べられています。

「何事でも神の御心になう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です」

ですから、もし神が祈りに応えてくださることを願うなら、まずしなければならなことは、自分が願い求めているものが、果たして神の御心と一致しているかどうかを点検することです。

私たちが祝された幸福な生活を送れるかどうかは、神の御前で聖さを求めることと深く関わってくるからです。たとえばブリストルに、事業を行っている実業家がいたとしましょう。しかしその人は非常に怠惰で、いつも仕事を怠けるのが町中の評判になっていきます。あるいは何とかいい加減に、最低限のことのみですませようとしているとしましょう。

このような人格の持ち主が今のような祈りに関する約束を耳にし、こう語ったとします。

「うまい話を聞いた。本当かどうか、試してみよう。神に一〇万ポンドを求めてみよう。実際に、それだけの金額を与えられるかどうか、試してみよう。そうすれば、仕事に身を入れる必要もなく、いつも遊んでいられるではないか」

そして、この人が毎日この巨額のお金を祈り求めたとしたら、このお金は与えられるでしょうか。もちろん絶対に与えられません。なぜでしょうか。動機に問題があるからです。この莫大なお金を貧しい人々に施すために祈る姿勢が、この人物には全くありません。あるいは神の働きにさらに積極的に貢献しようとする態度がまるでないからです。この人物は、ただ自分が怠惰な生活をして、この世の楽しみに耽^{かた}ることができればそれでいいと考えているのです。決して神の御思いを念頭に祈り求めてはいません。ですから当然のこと、どんなに長く、熱心に祈り求めても、その祈りが聞かれるということはありません。神の御思いに従って祈り求める時にのみ、神は応えることを保証されるのです。

御名によって求める

次に注意しなければならないポイントは、自分の行いや正しさによって祈り求めるのではなく、聖書が語っているように「主イエス・キリストの御名」によって求めなくてはならないということです。

ヨハネの福音書一四章一三節、一四節を開いて見てください。そこには次のようにあります。

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かを私に求めるなら、私はそれをしましょう。」（ヨハネ一四・

一三、一四）

ここでイエスさまは同じことを二度繰り返しています。この御言葉がいかに重要であるかを示すためです。聖書の中で同じことが二度繰り返される場合、何か重要な事柄が語られていると考えて、まず間違いないでしょう。主はこの御言葉を通して何をおっしゃろうとしているのでしょうか。もっと具体的にいうと、誰かが天国に行きたいと願っている場合、どうやって行くことができるのでしょうか。自分の優れた人格によってでしょうか。あるいは肯定的な点を主張することによってでしょうか。それとも、自分側に何か価値があるからでしょうか。ほかの人と比べてそれほど悪くはないからでしょうか。定期的に礼拝の場所に足を運ぶからでしょうか。少々お金を貸し人々に施すからでしょうか。はつきりいえることは、今述べてきたような方法で天国に凱旋^{がいせん}できる人は、誰一人としていないということです。確かに、礼拝の場に足を運ぶことは素晴らしいことです。神が与えてくださる豊かさの中から、貧しい人々を援助することも正しいことでしょう。高い倫理道德に従って行動することもそうです。しかしこのいずれをとってみても、罪人を天国に連れて行くのには不充分です。

私たちはこのままの状態では、靈的に失われており、滅ぼされて当然の状態にあるということを知らなくてはなりません。永遠の滅び以外に受ける報いはないと知る必要があるのです。教会で最高の人格者として知られている人物、あるいはこの町、この国、さらには全世界でそのように尊敬を受けている人であったとしても、神の裁き以外の報いを受けることはできません。それは罪人だからです。アダムが墮落して以来、自分の優れた人格によって天国に行った人は、ただの一人もいません。かつては、メシヤの到来を待ち望む必要がありました。しかし現在では旧約時代が過ぎ去りましたから、逆にメシヤなる主が生きられた時代を振り返る必要が出てきました。イエス・キリストが私たちの代わりに十字架につけられ、血潮を流されることによって、本来私たちが受けるべき裁きを身に受けてくださったのです。

私たちのすべての罪は、十字架の上のキリストの上におかれました。私たちがイエス・キリストの義を着せられるためです。このようにして、日の下に存在する最も汚れ、最も醜い罪人でも、主イエス・キリストに信頼をおきさえすれば、赦され、義と見なされるのです。この恵みを受けるためには、イエス・キリストに信頼をおくだけ

でよいのです。このようにして罪人は天国に行くことができます。

最終的に神の御前に立つことができる根拠は、主イエス・キリストを信じる信仰にあるのです。

それと同じことが、神の御前に祈りをもって近づく場合にも当てはまります。もし私たちが祈りの応えを願うなら、自分自身に頼って神に近づいてはなりません。主イエス・キリストに拠り頼んで御座に近づくのです。信仰によって、復活の主と一体とされた者、キリストを頭とする御体の一部となった者として神の御前に出る必要があります。

ただ恵みによって

自分は神の助けなしに正しい生き方をして来た——このような錯覚に陥ることのないようにしましょう。私は本来ならば、地獄以外の報いを受けることはありません。

ただ神の恵みによって、私は今までの五四年と九カ月の間、主を恐れて歩むことができました。神の恵みによって、誰にも偽善者呼ばわりされることのない生活をすることができました。誰一人として、罪ある生活をしているとって私を告発することはできないはずです。しかしそれでも本来の私は、滅び以外の何物をも受けるにふさわしい者ではありません。これは本書を手にとっておられるお一人おひとりにもいえることです。あるいは最も聖いといわれるような方々に関してもいえることです。ですから、私たちの人間的な善行を土台としたのでは、祈りが応えられるのに充分ではありません。しかし主イエス・キリストは尊い方です。この方を仰ぐ時、祈りに対する応えを期待できるのです。というのも、父なる神にとって、一人子イエスにお与えになるのに高価過ぎるもの、高すぎるものなどはないからです。私たちの主イエス・キリストこそは高価で尊い方なのです。主イエスには染みも汚れも全くありません。完全に聖い神の一人子です。主はどのような状況においても、神の御心に従って行動されました。ですから主に信頼をおき、主を前面に出して自分はその後方に隠れ、主イエスの御名によって祈るなら、祈りは聞かれるのです。

隣れみによる祈り

ある兄弟姉妹たちはこう言います。

「私は長年の間、まだ救われていない子供たちのために祈り続けてきました。それなのに、主は子供たちをまだ救ってくださいません。きっと私の祈りは応えられないでしょう。祈りが応えられるためには、私は罪に汚れ過ぎているのです。」

愛する兄弟姉妹、聞いてください。それは大変な思い違い、誤解も甚だしいということです。神の御言葉の約束は、何にもまして、弱い者のため、自分の足で立つことのできない者、愚かな者、そして必要を抱えている者たちのためにあるのです。

そしてそのように全く無力で右も左もわきまえないような私たちが、ただイエス・キリストの御名におすがりして祈り求める時、祈りは必ず応えられることが保証されるのです。

しかしこの「私は罪深い者だから」という言葉が、「私は罪の生活をしている。継続的に罪を犯すことが習慣となってしまう」という意味であるなら、確かに主が祈りに応答されることはありません。

詩篇六六篇一八節に次のようにあるからです。

「もしも私の心にいく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。」

つまり、私が罪の生活をし、神が忌み嫌われる道をあえて歩み続けるとき、主は私の祈りに応えられないのです。

受けたと信じる

第三番目の条件は、神には祈りに応える力があること、そして祈りに応えたいと

願っておられることを信じる信仰です。これは本当に大切なことです。

マルコの福音書一章二四節には次のように書かれています。

「だからあなたがたにいうのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」

そうです。「何でも」——それが何であろうと——すでに受けたと信じるのです。

私は現在、主イエス・キリストを心にお迎えして五四年と九カ月になります。その期間、私がただ信じさえすれば、主は御自身の定められたときに、必ず求めたものを与えてくださいました。ですから神には御業を行う力があることと、神が祈りに応えたいと願っておられることを信じることの重要性を、再度強調したいと思います。

主には祈りに応える力があるということを知るためには、主イエス・キリストの復活に眼をとめるだけでよいのです。もし父なる神が本当に主イエス・キリストを死からよみがえらせたなら、主は確かに全能の力を持つておられるのです。

そして主の愛を確かめたいなら、ただカルバリーの十字架に眼を注ぐだけでよいのです。最愛の一人子イエス・キリストを私たちのために手放されたほどに、神は私たちを愛してくださいました。

神の力と愛に関してこのような根拠があるのですから、信じるなら、確かに応答をいただくことができますのです。

待ち望む

復習します。第一に神の御思いにかない、真実に私たちにとって益となるものだけを祈り求めます。第二に、イエス・キリストの完全な聖さを根拠として、主の御名によつて祈り求めます。第三に、父なる神には応えを与えてくださるのに十分な力があり、祈りに応えたいと願う愛の心がおありになることを信じるのです。さて、最後にもう一つの条件が残っています。この第四番目の条件は、私たちが願っている応えが

与えられるまで、忍耐をもって神を待ち望むことです。というのもこの御言葉では、いつ、どのような状況下で祈りが応えられるかに関しては、何も述べられていないからです。

「求めなさい、そうすれば受けるのです。」

という非常に肯定的な約束は与えられています。しかし、時間に関しては何も語られてはいません。

「捜しなさい。そうすれば見つかります。叩きなさい、そうすれば開かれます。」

ですから祝福が与えられるまでの期間、私たちは、忍耐をもって神を待ち望み続ける必要があるのです。

しかしある方はこういわれるでしょう。

「一つの祈りの課題を神の御前に二度、三度、五度そして二〇度といった具合に繰り返し祈る必要があるのでしょうか。一度だけ祈れば、それで充分ではないでしょうか」

この問題についてはこうお答えしましょう。本来はただの一度も祈りを捧げる必要はありません。というのも、主は私たちが祈りを捧げる前から、必要がどのようなものを御存知だからです。ただ、主は私たちが自分に信頼をおくのではなく、神に信頼していることを実際に示して欲しいと願っておられるのです。創造主に対して、被造物としての立場を取っているかどうかを確認したいと願っておられるのです。

さらには、何かはつきりとした理由があつて、祈りが応えられないということがあるかもしれません。理由として考えられることの一つは、私たちの側で信仰を活用しなければならぬということです。というのは、信仰は活用することによって強められるからです。私たちクリスチャンはみな例外なく、信仰というものは、働かせないと、新生したばかりの状態にとどまるという事実を知っています。つまり試練の中で運用されることによって、信仰は強められるのです。もう一つ考えられるのは、私た

ちの忍耐を通して神の栄光が現されるかも知れないということです。忍耐は神の栄光を現す大きな恵みです。私たちが忍耐をもって神を待ち望むと、必ず神に栄光が帰されます。もしかしたら、他にも理由があるかも知れません。私たちの心は、まだ主からの応えを受けるために十分に備えられてはいないのかも知れません。

例えば三週間前に、一六歳の若者が主イエス・キリストを心にお迎えしたとしましょう。彼の心は主への愛に溢れ、主のために何かをしたいと考えています。そして日曜学校の監督のところへ行って、こう言います。

「僕も日曜学校で教えたいんです。一クラス任せてくれませんか」

すると、九人の子供たちのいるクラスが彼の手に任されます。この愛する兄弟は、神がこの九人の子供たちを救ってくださるように祈り始めました。自分の部屋でも、子供たちの前でも祈ります。そして子供たちに、神を求めるようにと奨励の言葉をかけます。日曜学校の授業が終わり、家に戻った後にも、神にあの子供たちを救ってくださいと思い求めます。翌日の月曜にも同じことをします。こうやって次の日も、そして次の日も祈り続け、翌週の日曜日がやってきます。そしてその日にはさらに熱心

に祈りを捧げます。そうしてからこの若者は、九人の子供たち全員が救われることを信じて第二回目の授業に臨みます。ところが、教室に行ってみると、子供たちは救われていません。以前とどこも変わっていないのです。そこでこの若者は、再び子供たちに福音を語ります。そして子供たちに主イエスを信じるように、励ましの言葉をかけます。さらには嘆願し、涙を流すことすらします。

第二週目に入ると、祈りはさらに切実さを増します。それなのに、次の日曜日に日曜学校に行っても、九人の子供たちのうち救われている者は一人としていませんでした。神はこの祈りに応えられないということでしょうか。決してそんなことはありません。この愛する兄弟が祈り続けるのに、神がそれに耳を傾けられないことは考えられません。それではどうしてこのようなことが許されるのでしょうか。それはこの若者の心の状態が、まだ祝福を受けるために備えられていないからです。もしこの子供たちが、最初の週に救われていたら、恐らく彼は自分の力でそれを成し遂げたのだと錯覚していたことでしょう。聖霊の力ではなく、自分の力によってなされたと思い込んでいたことでしょう。

自分では意識しないかもしれませんが、ある程度まで自分に栄光を帰してしまったのではないでしょうか。しかしこの若い兄弟が忍耐をもつて祈り続けるなら、そして前進し続けるなら、心が祝福を受けるのにふさわしい状態になった時、神はそれをお与えくださるでしょう。神の子供たちがしばしば待たされる理由がここにあります。しかし心の状態が整いさえすれば、神は必ず祝福を与えてくださるのです。神に愛されているにもかかわらず、クリスチャンの多くは、瞬間的に祈りが応えられないと、たじろいでしまいます。そして何週間、何ヵ月、あるいは何年もの間祈りが応えられないまま時が過ぎてしまうため、ついには祈り求めること自体を放棄してしまうのです。このようにして、忍耐をもつて祈り続ければ、確実に与えられたはずの応えを受け損ねてしまうことになるのです。

しかし神を待ち望むことを考える時に、重要なことがあります。神の御心に歩み、祈りの中に主を待ち望むクリスチャンであるなら、かなりの頻度でその祈りが応えられているはずです。もつとわかりやすく説明しましょう。信仰の段階がどのようなものであれ、クリスチャンであれば、一日の生活が終わると、その日現された主の恵み

に関して感謝を捧げるでしょう。そしてその晩、守られ、安らかに眠れるようにと自分の身を神に委ねるに違いありません。

そして翌朝、眠っている間に火事が起きたり、あるいは強盗に押し入れられたりすることがなかったことに気づきます。これは祈りに対する応えです。ですからこのことに関して神に感謝を捧げる必要があります。このような、ともすると見過ごしがちで、当然視しやすい事柄に眼を向けることができるようになります、より効果的に祈りの応答を得る技術を身につけるようになるのです。不眠症に悩まされたことのある多くの方々が、祈りを捧げた結果、安らかな眠りにつくことができたことと証しています。その場合、主にこの恵みに関して感謝を捧げることを忘れてはなりません。

しかしそれと同時に、すべての人は、祈りが応えられるまで待ち望まなくてはなりません。例えば、神に愛されているクリスチャンの多くは、自分の子供が救われるまでかなりの期間待たされます。さらに人によって、その待たされる期間が違うのも事実です。ある方々が比較的早く祈りが応えられるのに対して、他の方々は何年もの間応えを待ち望まなければなりません。

私自身このことを証しすることができます。私は祈った瞬間に応えが与えられるという体験を数多くしてきました。その回数は、数万回を下りません。主イエス・キリストを信じてから現在までの五四年間、祈りが捧げられた次の瞬間、あるいはその日の中に祈りが応えられた回数は三万回を下らないと言っても誇張にはならないでしょう。

しばしば、朝寢室を出る前に、目覚めてから捧げた祈りへの応えが与えられるのです。そしてその日の中に、五つか六つ、祈りへの応えがさらに与えられます。ですから祈りを捧げた瞬間、あるいは祈りが捧げられたのと同じ日に応えが与えられたことが、少なくとも三万回はあったということです。

しかしこのようにお話しすると、私の祈りがすべてこのように応えられたかのような印象を与えてしまうかもしれません、そうではありません。すべての祈りが迅速に応えられたわけではないのです。時には数週間、あるいは数カ月、もしくは数年もの間待たされました。神が瞬時に、あるいは同じ日に祈りに応えてくださった体験を持つ同じこの私が、他の祈りの課題に関しては何年もの間、応えを待ち望まなければ

ならなかったのです。一八六六年の最初の六週間の間に、長年とりなしてきた六人の方が救われたという報告を耳にしました。その中の一人のためには、二年から三年もの間祈らなければなりませんでした。また別の一人のためには、三年から四年もの間祈りを捧げなければなりませんでした。もう一人のためには、七年間もとりなさなければなりませんでした。四番目の方のためには、一〇年もの間祈りを捧げることが要求されたのです。五番目の方のためには、約一五年間祈りました。そして六番目の方のためには二〇年以上も祈り続けなければならなかったのです。

私は以前、あることを求めて神に祈り求めました。それが主の御心に沿ったものであることはわかっていました。そのことに関して毎日、そして多くの場合、一日に何度も祈りを捧げました。しかも、その応えが与えられる前から、それがいただけることを何百回も感謝したほど、確信をもって祈ったのです。にもかかわらず、その祈りに対する実際の応えと祝福を受け取るまでには、さらに三年と一〇カ月を要しました。また別のときには六年間待たされました。またさらに別の機会では、一一年と六カ月の期間、主を待ち望まなければならなかったのです。たった今述べた祈りの課題

に関しては、不動の確信をもって、約二万回も、主の御前に祈りを捧げました。にもかかわらず、一一年と六カ月の期間、待たされたのです。

また別の機会では、私の信仰はさらに厳しく試されました。一八四四年の十一月に、私は五人の救われていない人々のために祈り始めました。健康である時も、病の床に伏している時も、陸を旅している時も、海を旅している時も、祈り続けました。そしてどんなに説教要請の数が山積したときにも、この祈りを忘れたことは一日もありませんでした。この五人の中最初の人が救われるまでに、一八カ月の時が過ぎ去って行きました。私は神に感謝し、さらに祈り続けました。それから五年の歳月が過ぎ去りました。そしてついに二番目の人が主イエスに立ち返ってきました。そこで私はこの二人目の回心のゆえに神に感謝すると、残りの三人のために祈り続けました。私は日々この三人のために祈ったのです。三人目が救われるまでに、さらに六年の月日が過ぎ去って行きました。そしてようやく三人目の人が救われたのです。この三人のために主を讃えようと、私はさらに残る二人が救われるために、祈り続けました。そしてこの二人は、いまだに救われていません。神の豊かな恵みによって、何万回とな

く、瞬間的に、あるいはその日のうちに祈りに応えられた私が、この二人の個人の救いのために、三六年間もの間祈り続けなければならず、しかもまだその応えが与えられていないのです。今度の十一月で、祈り始めてからちょうど三六年になります。しかしそれでもなお私は神に望みをおいて祈り続けているのです。そして答えが与えられるのを期待して待ち望んでいます（注、この中の一人は、ミュラーの死の直前に救われた。他の一人がはつきりと救われたのはミュラーの死後のことであった）。

ですから兄弟姉妹たち。神を待ち望み続け、祈り続けてください。ただし、神の御心になうものだけを求めるように気をつけてください。罪人が救われることは、神の御心に沿ったことです。なぜなら主は、決して罪人の死を喜ばれないからです。次の御言葉からも、この神さまの御性質は明らかです。

「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」（ペテロ第二、三・九）

ですから愛する友よ、どうか祈り続けてください。応えを期待するのをやめてはなりません。いつそれが与えられるのかわからないのですから、眼を見開いて、見張っていることです。そしてついに応えが与えられた時、主に感謝を捧げることを忘れないでください。

一致した祈り

愛する兄弟姉妹たちに、もう一つ指摘しておきたいことがあります。それは、一致した祈りの重要性についてです。

「まことにあなたがたにもう一度告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。」（マタイ一八・一九）

ですからもし、まだ救われていないお子さんをお持ちの方がおられるなら、二人あるいは三人で集り、一致して子供たちの救いのために祈ることをお勧めします。そうすれば、どんなに大きな祝福が注がれることでしょうか。共に集うとき、主の御前にこの御言葉の約束を差し出しましょう。声に出し、この御言葉が確かに自分の状況に当てはまることを確認するのです。一週間に一度、三〇分間、あるいは二週間に一度かもしれません。または、状況に応じてもっと頻繁に祈りを捧げるかもしれません。いずれにせよ、主の御前にこの約束を掲げつつ祈りを捧げるなら、どのような結果になるでしょうか。

一人の父親はこう語るかもしれません。

「私の心が張り裂けるほど放蕩三昧をしていた息子が、ついに主イエス・キリストを受け入れた！」

またある母親がやって来てこう証しするようになるでしょう。

「一五年前に家を出て、罪深い生活をしていたうちの娘が、主イエスを受け入れまし

た」

このような一致した祈りと、その結果与えられる証しによって、どんなにかクリスチャンの信仰が強められることでしょうか。そしてこのような一致の祈りによって信仰が強められたなら、今度は教会の牧師のためにとりなしてはいかがでしょう。神がさらに牧師の働きを祝福してくださるように、それによって罪人がさらに救われるように祈り、さらには教会全体に祝福が注がれるように祈るのです。そして祈りのチーム・ワークが進むにつれ、とりなしの対象をさらに拡大し、宣教のために、そして聖書とトラクト配布のために祈ることができるようでしょう。この祈りの輪に参加する人たちは、祈りに秘められている力と祝福をさらに豊かに知ることになるでしょう。そして熱心に神を待ち望むようになるに違いありません。そうすれば、この時代にあつて再びキリストの御体全体にリバイバルを起こしてくださるように、神に祈り求めることもできるようになるでしょう。

もしこのように共に祈り合う風景がごく一般的なものとなるなら、牧師たちはそれほど力強く福音を語ることができるようになるでしょうか。日曜学校、聖書の配布、

あるいは野外伝道集会の上に、そしてその他のクリスチャンが行う働きに、どれだけ祝福が注がれることでしょうか。どうか主が憐れんでくださって、私たちがさらに祈りに身を捧げることができるようになりますように！

祈りの記録

さて、このような祈りの生活を送る中で、神が恵みをもってお与えになる祈りに対する応答を、心の中に宝として蓄えることが非常に祝福であることに気づきました。記憶を絶えず新鮮に保つために、私は祈りに関する記録を付けることにしています。皆さんにもこのような小さなメモ帳をつけることをお勧めします。そしてページの一方に——ここでは仮に左側ということにしておきましょう——祈りの課題といつ祈りを捧げ始めたのか、その日付を記しておくのです。反対側は、与えられる祈りの応えを一つひとつ書くために開けておきます。こうしておくと、主がどれほど祈りに応え

てくださったかを知るのに、さほど時間はかからないことでしょう。祈りが応えられるたびに、あなたは励ましを受けることになるでしょう。そして信仰もまた非常に強められます。そして何よりも、神がいかに憐れみに富み、恵みに満ちた方であるのかを発見し、こう叫ぶことでしょう。

「私の天のお父さまは、私にこんなに良くしてくださる方です。ですから、私は神に信頼しましょう。神にすべてをお委ねしましょう！」

このすばらしい主をまだ知らない方がおられるなら、今晚この場所から帰る前に、この初めての祈りを捧げましょう。

「主よ。どうか、私が罪人であることを示してください」

そして自分が罪人であることがわかったなら、さらにこう祈りましょう。

「主よ。イエス・キリストを信じることができるよう、私を助けてください」

この祈りをすれば、神が祝福を注ぐとして、あなたを待っておられる方であることを発見することでしょう。

すでに神の民に加えられた者たちに、祝福が豊かに注がれますように。そしてまだ

主イエスの御元に帰っておられない方の心に、お会いできる間に主を求め願いが起こされますように。愛する友たち。あなたもわたしも罪人であることには変わりません。違いはただ、主の愛に心を開いているかないかだけなのです。

愛する父なる神よ、主イエスのゆえに、この祈りに応えてくださいますように。

第三章 祈り続けよ

効果的な祈りを捧げるための条件を理解しようとする時に、しなければならいことがあります。それは、聖書の一つの箇所を別の箇所と比較して研究することです。というのも、一つの箇所ですら十分に述べられていない事柄を他の箇所が補足するということがあるからです。

一、ヨハネの第一の手紙、五章二三節から一五節までを学んでみることにしましょう。

「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。」

ここに神に聞かれる祈りをするための第一条件が書かれています。それは、神の御

心になうものを祈り求めるということです。ですから何かについて、神の御心がわからなかった場合、主に求める前に、神の御心が何であるのかをまず教えていただくのです。神の愛は永遠であり、知恵に満ちています。子供が求めるものは何でも与える愚かな親がいますが、そのような愛とは違うのです。神は御自分の子供たちが、本当の幸福と祝福に満ち溢れることを願っておられます。ですから、私たちの益になるものしかくありません。

二、主イエス自らが、祈りが応えられることを願うなら、主の御名によって求めなさいと語っておられます。

「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましう。」（ヨハ

ネ一四・二三、一四）

三、もう一つ欠かすことのできない点があります。神には祈りに応えるだけの力があり、そうしたいと願っておられると信じることです。

「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」(マルコ一・二四)

つまり祈りを捧げた後、応えが届けられるのを、期待をもって見張る必要があるのです。神がどのような応えでもお与えになることができますと、ほとんどのクリスチャンは信じています。しかし、主が本当に自分の祈りに応えたいと願っておられるのかどうかとなると、多くのクリスチャンが自信を失ってしまいます。そのようなクリスチャンは、次の御言葉を忘れていきます。

「私たちすべてのために、御自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあ

りましょう。」(ローマ八・三二)

四、この三つの条件が整っているとしましょう。詩篇六六篇一八節に、重要な条件がもう一つあります。

「もしも私の心に抱く罪があるなら、主は聞き入れてくださらない。」

五、もう一つだけ大切なことがあります。それは、祈りの応答が具体的に与えられるまで、希望を持って神を待ち望むということです。私たちの多くは、この点でつまづいてしまいます。そして祈りの課題を途中で投げ出してしまうのです。多くのクリスチャンは知恵を持って祈り始めるのですが、それを継続しないことが多いのです。

何カ月にもわたって、あるいは何年にもわたって祈り続けているというのに、応えが与えられない場合があります。そのような時、私たちの多くは「果たして神は祈り

に「応えてくださるだろうか」という思いに苦しめられると思います。多くのクリスマスチャンは、思ったほどすぐに祈りの応えが与えられないので、祈りをやめてしまうのです。

両親は自分の子供たちのために祈りを捧げます。祈り始めるのはよいのですが、その場合忘れてはならないことがあります。それは祈り続けるということです。何日も、何週間も、何カ月も、さらには何年もの間続くこともあるでしょう。しかし祈りが応えられるまで、祈りをやめてはなりません。なぜなら父なる神は、私たちのために、祈りの応えをいつ与えるのが最善かをよく御存知だからです。ですから神は、御自身の時に祈りへの応答を与えてくださいます。そのように待つことが許されるのは、様々な理由があることでしょう。信仰の実質を試されているのかもしれないし、忍耐が磨かれているのかもしれませんが。もしかしたら、心の底から純粋に願い求めているのかどうかを主はお知りになりたいのかもしれませんが。今述べたような理由で、あるいはほかに沢山のことが理由として考えられるでしょうが、祈りが私たちが願っているほどの速さでは応えられないことがあるのです。

若い働き人は、多くの人々の回心のために神に祈り求めます。祈り、説教し続けるのですが、応えが与えられません。なぜそうなるのかというと、もしかしたら、そのような祝福にあずかる用意がまだできていないからかもしれません。もしそのような願いが聞き入れられたら、その若い説教者の魂にとつては、祝福はおろか、逆に害をもたらしってしまうからかもしれません。ですから主は、祝福を受ける備えができるまで、祈りに応えることをあえて待たれるのです。同じことが日曜学校の教師に關してもいえると思います。彼らも日曜学校の生徒たちが良きものに恵まれるようにと祈りますが、応えが自分の考えている方法ではきません。しかしそのような時にこそ、祈り続けなくてはなりません。忍耐をもって、そして静かに主を待ち望みましょう。主が祝福を注がれないなどということは、決してありえないからです。

皆さん、忍耐をもって、執拗に、一カ月でだめならば、二カ月、一年で応えが与えられないならば、二年と、神を待ち望む習慣がついているでしょうか。もしそうであるなら、新たな熱心さと信仰をもって、再び祈り始めましょう。すべての願い事に関して、それが神の御心に沿って捧げられたものであるなら、また、主イエス・キリス

トの御名によって願ったなら、そして求めたものを与えたいと主の側で願っておられることを信じるなら、その祈りは応えられて当然なのです。

私自身、ある祝福を受けるためにかなりの期間待たされました。多くの場合祈りに対する主の応えは瞬間的であったり、祈りを捧げてから一時間以内であったり、祈ったのと全く同じ日の中であつたりしました。にもかかわらず、他のいくつかの事柄に關しては、何年も待たされたのです。ある場合などは一〇年間、一五年間、さらには二〇年間、そしてそれ以上の期間待たされたのでした。しかしそれでもことの結末はどれも同じでした。ついには応えが必ず与えられたのです。キリストにある兄弟姉妹たちを励ますために、私はこう言いましょう。主を待ち望み続けてください。主を待つて、待つて、待ち望むのです。投げ出しかけた祈りの課題を新たに神の前に差し出しましょう。主は必ず応えてくださいます。私はあることに關して三九年と九カ月祈り続けています。そしていまだに応えは与えられていません。昨晚もそのことのために祈りましたし、一昨日の晩にも祈りました。

インドやアメリカを旅しながら、何年も私は祈りを捧げ続けてきました。ついには

応えがいただけることを確信しています。今まで何万回も主は私の祈りに応えてくださいましたが、この課題に關しては私はさらに主を待ち望まなければなりません。ある時、私は一人の友人の両親の救いのために祈ったことがあります。ついには主が応えてくださった時には、友人の父親は八〇歳を過ぎ、九〇歳になろうとしていました。

この方は自分の息子を完全に勘当していたのです。何年もの間、何としても息子と顔を合わせません。しかしついに時が来たのです。この父親の心は柔和になり、人をやつて息子を呼びに行かせました。今では、その息子が自分から離れることを許さないまでになっています。しかしこの父親の救いのためには、なぜか二〇年間、祈りを捧げ続けなければなりませんでした。友人の母親に關しても同様であつたのです。

ですから愛する兄弟姉妹たち。今まで以上の新たな熱心さを持って、再び祈り始めようではありませんか。ついには必ず応えはやつて来るからです。主は御自分の子供たちを祝福することをこのほか喜ばれます。子供たちにとって祝福となり、慰めとなるすべてをお与えになることは、実に父なる神の切なる願いなのです。中でも主は、子供たちのためにとりなす両親を祝福することを喜ばれます。しかし、もし私た

ちが両親としての責任を果たさず、自分勝手な道を子供たちに歩ませてしまったなら、祈り求める前にまずしなければならぬことがあります。正直に自分の犯した罪を神の御前で認めることです。そして現在体験している苦しみは、自分が怠った責任のゆえであることを素直に認めようではありませんか。こうして共に灰をかぶって主の御前にへりくだりましょう。しかし絶望することはありません。十字架の恵みのゆえに、私たちは神が私たちを憐れみ、喜んで赦してくださることを発見するからです。このようにして主から赦しを受け取ったなら、新たな熱心さを持って、再び共に祈り始めましょう。

神がなされた奇跡（ある著名な伝道者が語った話）

何年も前に、私は初めて米国の地に赴きました。その時乗った客船の船長は、私が知っている中でも最も献身的な人物でした。

ニューファンド・ランド島の沖にまでたどり着いた時、彼は次のような話をしてくれました。

「五週間前にもこうやって海を渡っていたんですがね、イングリス先生、私のクリスチャン生活を根底から覆すような大事件が起きてしまったねえ。実はブリストルのジョージ・ミューラーが乗客の一人でした。私はそれまでブリッジを二四時間離れたことがなかったんですが、ミューラー師が私のところに来て、こう言うんですよ。

『船長、伝えたいことがあります。どうしてもカナダのケベックに土曜日の午後までに到着していなければなりません』

『それは不可能ですよ』と私は答えました。

するとミューラー師が何と答えたと思いますか。

『わかりました。この船がケベックに土曜日までに着くことができないなら、神は別の方法を何らかのかたちで見つけられることでしょう。私は五七年の間、ただの一度も説教奉仕の約束を破ったことがないのでから。さあ、海図の広げてある下の部屋に行つて祈りましょう』

私はこの神の人を見つめました。もしかしたら精神病院のお世話にでもなっているのだろうか、と思わず考えてしまいました。そんな話を今まで聞いたことがなかったからです。

『ミューラー先生、この霧がどれだけ濃いのか御存知ですか』

『いいえ』とジョージ・ミューラー師は答えました。『私は、どれだけ霧が濃いかではなく、生ける神に目をとめているのです。神は、私の生活のあらゆる状況を支配しておられるのです』

それから彼は、最も単純な祈りを捧げました。その後で私が祈ろうとすると、ミューラー師は私の肩に手を置いて、祈らなくてもいいと言うのでした。そしてこう説明するのです。

『第一に、君は主が御業をなされると信じていない。第二に、私はすでに主が祈りに応えて

くださったと信じている。だから君が祈らなければならない理由はどこにもない』

私が彼を見つめていると、ミューラー師は続けて言いました。

『船長、私が主を知るようになってから、もう五七年になりますが、主が私の祈りを聞かれなかった日は、一日もありません。船長。さあ、立ちましょう。扉を開いて御覧なさい。霧はもうなくなっています』

立って扉を開くと、確かに濃霧は消え去っていました。

土曜日の午後、ジョージ・ミューラー師はケベックに到着し、予定通りに奉仕をすることができたのです。